



32 うかれバイオリン (イギリスの昔ばなし)

「ご苦労さん、銅貨3枚あげるよ。」むかし、ある若者が長年のお給金に、たった3枚の銅貨をもらいました。しかしその金の値打ちを知らない若者は、それを大切にしまいこんでニコニコと旅に出かけます。道の途中で、かわいそうなおじいさんと出会った若者は、大切なお金を全部渡してしまいました。たいそう感謝したおじいさんから、若者は“誰でも楽しくなって踊りだすバイオリン”をもらいました。次に若者は、ある男に銀貨1枚で頼まれた、木を切り倒す仕事をしました。しかし、お金が惜しくなった男は、銅貨しか払ってくれません。若者は、バイオリンを弾き始めました。すると、男の手足が勝手に踊りだしました。「頼むから、もうやめてくれ!」クタクタになった男は、銀貨を払いました。気が取らない男は、こともあろうに役人に訴えました。役人が首になわをかけようとしたとき、若者は「この世のなごりにバイオリンを弾かせてください。」と言いました。男はあわてて弾かせないようにしましたが間に合わず、みんな踊り始めました。若者は、銀貨を取り戻し、バイオリンを肩に楽しい旅に出かけました。

ダンスが止まらない魔法の楽器でした。

ローム君の新・博物日記

世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

●とてもヨーロッパ的な昔ばなしです。

「うかれバイオリン」は、イギリスの他にも、ドイツ、フランス、スペイン、東欧、北欧諸国などに広く分布する昔ばなしで、主に西洋で好まれています。この「踊りを踊らせる楽器」のモチーフは、西洋独特で、日本の昔ばなしでは見られません。といえば、モーツアルトのオペラ「魔笛」にも、このモチーフが見られますね。少なからず、西洋諸国の踊りと音楽を愛する文化が影響しているようです。また、お人好しで心の優しい働き者が、最後に幸せになっていったり、危機的状況にある主人公が「最後の頼みみに」と相手に頼って事態が好転します。どちらも、ヨーロッパではよくある昔ばなしの形。この昔ばなしは、現地でとても親しまれる要素を持った話なのです。

●かつてバイオリンは粗野な楽器だった?

バイオリンの起源は、はっきりと分かっていませんが、弓でひく弦楽器は、すでに紀元前3世紀のスリランカで存在していたようです。また、17世紀までのバイオリンは、民族舞踊の伴奏などにしか向かない粗野な楽器とみなされていました。すでに、サロン向け楽器として完成されていたピオールという弦楽器の方が「音楽的」とされていたのです。この昔ばなしが成立したのは、17世紀以前。昔ばなしのバイオリンと踊りには、そんな背景があったのですね。ところが、大きなホールで歌劇が演奏されるようになると、音が静かなピオール族から、音量が大きく表現力豊かな

バイオリン族へと主役の座が移りました。そして、より良い音を奏るために演奏技法などの工夫が常に続けられたバイオリンは、ますますその真価を發揮し、18世紀後半の大きな改良を経て「楽器の女王」としての地位を固めました。昔ばなしのような、見事な形勢逆転ですね。

●音の感じ方の違いが影響した、東西の踊り。

昔ばなしのように、人間にとて、踊りとそれに伴う伴奏楽器は密接に関わってきました。洋の東西で踊りの比較を単純にはできませんが、それでも音の好みからくる差違はあるようです。西洋の音楽は伝統的に不協和音をいかに制御するかに力を注ぎ、作曲上不協和音が出そうになども、前後の音を強くして目立たなくしたりします。そのため、西洋では音の強弱に対する意識が強く、それが跳ねるようなステップに関係しました。クラシックバレエなら、伴奏音が盛りあがるところでダンサーは躍る、といったように。西洋の踊りは、タテの動きだとよく表現されます。それに対し東洋では、不協和音はあまり気にされず、流れがとぎれない一定な音楽が好まれてきました。ステップも、すり足のようなものになり、東洋の踊りはヨコの動きと表現されるのです。でも、昔ばなしのバイオリンが奏でられると、東洋人も飛びあがるようなタテの動きで踊ってしまいそうですね。

昔ばなし監修／昔ばなし研究所所長 小澤俊夫
取材協力／京都市立芸術大学音楽学部 教授 山田陽一